

ロシアのリスク・プレミアム - ホドルコフスキー逮捕の裏の裏

盛田 常夫

本誌 9 月号で予告したように、ロシア最大の富豪で、巨大石油企業 Yukos の事実上の所有者 ホドルコフスキーが逮捕された。国際金融界はロシアへの投資を脅かす KGB 主導のプーチン政権の暴挙と批判している。Yukos の外人アドバイザーたちも、その政治力をフルに活用してロシア政権を批判し、EU 委員会やアメリカ国務省などを通して、ロシアへの圧力を強めている。

他方、ロシアの検察当局は、一連の逮捕に続き、会社首脳が保有していると目される Yukos 株 44.5%を差し押さえた。Yukos 株の 60.1%はホドルコフスキーと彼のパートナーたちがジブラルタルに設立した Group Menatep が保有する。正確に言えば、Group Menatep がマン島に登録した 100%子会社の Yukos Universal Ltd.が 3.54%を保有し、この子会社がキプロスに設立した Hulley Enterprises Ltd.が 57.47%を保有している。この二社が保有する株式の取引が凍結された。

国際金融界は暴挙と批判するが、ロシアの民衆は富豪の逮捕を歓迎している。そこにはソ連の国営企業を乗っ取り、ロシア経済の支配者となった一握りのオリガーク（寡占的支配者）への憎悪がある。メディアは例のごとく、クレムリンの権力闘争と陳腐な解説をしている。しかし、この事件はソ連崩壊から連なる根深く、暗黒の歴史的過程の結果なのである。

赤いローンドリング：闇に消えた巨額資産

ソ連時代、共産党は緊急時に必要になる資金を蓄え管理していた。共産党の財政局と KGB 担当部局がこれを秘密裏に管理していた。タックス・ハイブン地に資金管理・運用の会社を設立したり、ダミーの銀行を海外に設立したりして資金を蓄えていた。ここに蓄える資金調達のために、各種の架空貿易契約が締結され、ソ連から輸出された商品売買代金を国外の銀行口座に

留め置き、これを資金運用会社に移すシステムを構築していた。

1991 年のクーデター失敗から 5 日後、ソ連共産党の資産を一手に管理していたニコライ・クールチナは、共産党本部の窓から「身投げ」した。その 6 週間後、彼を継いだパヴロフも同じように「身投げ」した。1989 年から 1991 年にかけて、ソ連の金準備 1500 トンのうち 1000 トンが処分されたが、その資金がどのように流れたのか、海外に蓄えられていた共産党資産がどこにどれだけあったのか、何一つ明らかになっていない。

アメリカの CIA はソ連時代からソ連共産党の国際的な資産形成を追跡しており、ガイダールは首相就任と同時に、CIA にたいして、ソ連共産党の海外資産の行方を調査するように依頼したが断られた。クールチナの「自殺」によってソ連共産党資産の行方と資金の使い道は永遠に闇の中に葬られた。

実業家ホドルコフスキーの出生

ロシア経済の 6 割を支配すると言われるロシアのオリガークたち。そのほとんどが旧体制で育ったエリートであり、ペレストロイカで始まった起業家支援のプログラムを利用して、共産党と政府のバックアップを受けた青年実業家である。ホドルコフスキーはゴルバチョフが共産党書記長に就任した当時、メンデレーエフ化学大学のコムソモール（共産党青年組織）の副書記長だった。コムソモールの凋落を防ぎ、かつ新しい経済的実験を試すために、各地のコムソモール組織に自主的な営業活動が認められた。1987 年のことである。

当時、ソ連ではソ連中央銀行から商業銀行機能が分離され、いくつかの専門商業銀行が設立されるとともに、民間の協同組合銀行の設立が

容認されるようになった。そこで、ホドルコフスキーたちは、手がけていた商品取引のファイナンスのために、自前の銀行の設立を計画した。これが彼の Bank Menatep である。1988 年、ホドルコフスキー弱冠 25 歳のことである。この時期に商業銀行設立の認可を得たことは、ソ連中央銀行や共産党との良好な関係を示している。明らかに、中央銀行や共産党の幹部の中に、ホドルコフスキーたちを助ける、あるいは利用しようとするグループがいたのである。

Bank Menatep はすぐにスイスに投資会社を設立し、さらにジブラルタル、マン島、キプロスに会社を設立して、海外への資金移転のシステムを構築する。この 7 月に逮捕され拘束が続いているホドルコフスキーの盟友で Yukos 社長のレヴェジェフは、Bank Menatep の経理部長からキャリアを積み上げた人物だが、彼がこの時期の経験を利用して、後に Yukos の所有関係を不透明にする海外子会社の設立の戦略を練ったと言われている。それはともかく、ソ連時代に、それも設立したばかりの海の物とも山の物とも分からない民間銀行に、国外の子会社設置が認可される訳がない。しかし、ソ連の崩壊過程の中で監視が緩んでいた。その間隙をぬって、外国での資産運用のノウハウをもっていたソ連中央銀行の担当部局が、共産党や KGB の対外資金管理局の誰かが、将来のソ連共産党とソ連邦の崩壊を見越して、ホドルコフスキーたちに知恵を与えたのではないか。1990 年、ゴルバチョフはホドルコフスキーを初めとする若い実業家の卵たちをクレムリンに招待して誉めあげたから、この種の共同謀議に障碍はなかった。

赤いマフィアの形成：体制転換犯罪

1990 年 11 月、ソ連中央銀行と KGB が外国での資金管理・運用に使ったのが、オフショアのタックス・ヘイブン地であるジャージー島に設立された Fimaco と呼ばれる会社で、およそ 500 億ドルの資産を運用していたことが暴露された。

さらに、1996 年にプライスウォーターハウスが発表したロシア連邦銀行の監査報告で、ロシ

ア連邦銀行に融資された IMF の資金 120 億ドルが、この Fimaco に移されていることが明らかにされ、一大スキャンダルになった。この時期からロシアへの IMF 融資に絡み、アメリカの連邦捜査当局の内偵が始まり、いろいろな事実が表に出てきた。

その一つが、アメリカのニューヨーク銀行を舞台にしたマネー・ローンダリング。1999 年春から秋にかけて史上最大のローンダリングと騒がれたスキャンダルの主役は、ニューヨーク銀行の東欧業務責任者でロシア人ナターシャ・カガロフスキー。彼女の亭主コンスタンティン・カガロフスキーは 1992-1994 年に IMF のロシア代表を務め、その後にホドルコフスキーが設立した Bank Menatep のボードメンバーになり、Bank Menatep がロシア危機で破産した後、Yukos の副代表に収まった。彼がロシアからの私的公的あるいは闇の資金の流れを仲介していたと見るのが正しいだろう。カガロフスキーが Yukos に移った後には、アメリカの捜査当局の内偵が Yukos に及び、所有構造を分散させた Yukos が、本社、持株会社、子会社の間で価格移転をおこない、本社の利益を子会社に移していたと分析している。

「ニューヨークの老舗銀行がどうしてこのようなスキャンダルに」、と考えるのは素人。銀行にとって、大きな資金を扱うことができればそれだけで巨額の手数料が手に入る。白かろうが黒かろうが、巨額の資金を扱えるなら、喉から手が出るほど有り難い話なのだ。このような資金を集めてくる「金蔓（カネヅル）」は破格の待遇で銀行に飾っておくだけでも良い。だから、このナターシャは Senior Vice-President の肩書きをもらい、ニューヨーク銀行の東欧業務担当の責任者になり、リヒテンシュタインに設立されていた Tetra Finance の実質的な資金運用も任された。この Tetra Finance はロシアの Inkombank のオフショア会社で、ロシアのマネー・ローンダリングの受け皿だった。ニューヨーク銀行で一回洗淨して、ここに送る。ナターシャは、70 億ドルの不法送金に関わった容疑で、ロンドン支

店にいたロシア人の夫をもつ女性行員とともに事情聴取を受けた。

このロンドン支店の女性行員のロシア人亭主ピーター・ベルリンは、やはりニューヨーク銀行にローンダリングの口座をもっていた Benex 社の所有者で、この会社はブダペストを拠点にしていたロシア・マフィアの大家モギレヴィッチのローンダリングも請け負っていた。容疑となった 70 億ドルのうち、Benex 社の口座から 1 万回以上の取引を経由して、42 億ドルの資金が洗浄された。モギレヴィッチはアメリカとブダペストに CIS 向けの「ハイテク」製品を製造する工場をもっており、これらのモギレヴィッチの「合法」会社の資金を扱っていたのが Benex 社だ。モギレヴィッチは FBI とハンガリー警察の捜査の対象になっていたが、1999 年のニューヨーク銀行事件発覚後、ハンガリーを離れた。

体制転換の過程で、解体された KGB のような秘密公安警察の要員は私的な警備会社を設立するか、マフィアを取り仕切る集団を形成するかして、新たな時代の生活の糧を得ようとした。海外のオペレーションに長けていた連中は、秘密裏に操作した資産をかすめて、実業家への転身を図った。まさに糸が切れた罫のように、旧体制の監視・管理者が独立自営の「赤いマフィア」へ転身した。国内では共産党やコムソモール組織の資産管理者もまた、転換過程のカオスに紛れて、資産の名義変更や売却を通して、私的な資産への転換を図った。ハンガリーでも、共産党の財政担当責任者だったマーティヤ、共産党青年組織のブダペスト書記長だったナジがハンガリーの億万長者リストに入っている。彼らは皆、旧体制の人脈とノウハウ、インサイダー情報を利用して、国家や党の資産を私財に転換した連中である。彼らの「体制転換」とは、「公的資産の私財への転換」だった。

もしホドルコフスキーがソ連中央銀行と共産党の対外資産の秘匿（ローンダリング）に関係していたとすれば、KGB の残党、つまり赤いマフィアとして自立できなかった KGB グループが、ホドルコフスキー逮捕に異常な熱意を示す意味

が理解できる。ホドルコフスキーと Bank Menatep、そして Yukos へと繋がる糸は、けっして透明ではない。

巨大企業の私物化：民営化犯罪

Menatep などの民間銀行設立の後、ロシアでは主要な国営企業の民営化が日程に上った。中でも、最大の焦点は石油・ガス・金属などのエネルギー・資源関連企業の民営化である。その主導権を握ったのはエリツインに取り入ったオリガークで、その取り仕切り役がベレゾフスキーだった。アル中で統治能力を欠いたエリツインの権威を利用したエネルギー・資源産業の民営化の頂点は、1995 年末の Yukos、Lukoil、Surgut、Sidanco、Sibneft、Norilsk の「負債と株式の交換」による私物化スキームである。

ホドルコフスキーが欲しがった Yukos 株 45% の入札は 1995 年の 12 月 8 日に行われ、一番高い応札は、Inkom Bank、Alfa Bank、Rossiisky Bank のコンソーシアムによる 3 億 5000 万ドルだった。しかし、保証金の一部が現金ではなく、財務証券だったところから無効とされ、900 万ドルの値を付けた Bank Menatep のダミー会社が落札した。こうして Yukos はホドルコフスキーの資産になった。ちなみに、入札の出発価格は 1 億 5000 万ドル。現在の市場価額で 200 億ドルを超える資産が、200 分の 1 の資金で入手できた。他の企業もベレゾフスキー・グループが独り占めした。エリツインのトラの威を借りたいいわゆる「（エリツイン）ファミリー」がロシアの企業の中でも、もっとも「美味しい部分」を独占することになった。やりたい放題とはこのことである。これに地団駄踏んで悔しがったグループがいたのは当然だが、KGB グループの中で、ベレゾフスキーやホドルコフスキーへの復讐を誓った者がいても何ら不思議でない。

「プーティン - オリガーク」パクト

プーティンは大統領に就任した 2000 年、オリガークとの間で相互不可侵の「了解」を交わした。プーティンはオリガークの過去の資産形成

の罪を問わないが、その代わりに政治に口出すことを許さないというものだ。いわゆる政経分離のパクトだ。しかし、ホドルコフスキーはこのパクトを公然と破ろうとしている。それが政権からの攻撃の対象になったというのが、メディアの一般的な説明である。

しかし、その時期と現在では状況が異なる。「ファミリー」の支援を受けて登場したプーチンは、即座にオリガークを摘発できる基盤をクレムリンの中にもたなかった。ハンガリーの週刊誌 HVG (2003.11.15) のミハイル・ジェルヤーギン (グローバルイゼーション問題研究所代表) へのインタビューによれば、「ファミリー」は 1999 年の政治危機の中でエリツインの後継者を探し始めたが、クレムリンの黒幕であるチュバイスとヴォロシンはプーチンなら操縦可能だと判断して、彼を推薦したのだという。今となっては、この選択は「ファミリー」にとって大誤算だった。

クレムリンの「ファミリー」の力が強い間は、プーチンにはオリガークの犯罪を摘発する手段がなかった。象徴的にベレゾフスキーとグシンスキーを「悪の総代理」にして、それ以外は不問となった。しかし、エリツイン時代に「ファミリー」のやりたい放題を見てきたプーチンや KGB 残党には期するものがあっただろう。ここ 3 年は出身のペテルスブルグ KGB の部下を登用して「ファミリー」の力を次第に削ぎながら自らの地位と権力を築いてきた。その間に、オリガークの不正をめぐる国内の議論が活性化してきた。エリツイン時代の「民営化」の見直しの議論も公然と行われる状況になった。

その転機になったのが、今年 2 月のオリガークとプーチンの会合である。その場で、ホドルコフスキーは、「ロシア官僚の腐敗が年間 300 億ドルの損失を生んでいる」と主張したようだ。これにプーチンが切れた。「お前に説教する資格があるか」、と。ここから、プーチンは攻勢に転じた。「蓄財した者は政治に精を出すのではなく、富を社会に還元することを考えたらどうなんだ。それができないなら覚悟しろ」。

ポターニンは恭順の意を示し、アブラモヴィッツもロシア国内の資産を売却して、ロシアからの出国を検討していると言われる。それにたいして、ホドルコフスキーは国際的なアドバイザー陣やコンサルティング会社で身を固め、ロスチャイルド家まで引っ張り出して、お金で買った人脈を総動員している。国内では「リベラル派」や共産党にまで資金を提供している。自らが政権を握らない限り、ロシアにおける自らの地位は安泰ではないからだ。

アメリカの Yukos アドヴァイザーたちは、Yukos がロシアでもっとも透明度の高い企業であり、そのような模範企業に仕上げたホドルコフスキーは市場経済の旗手だと誉め上げ、いかに不正に取得された資産でもこのような模範的な企業を育てた人物は、余人を持って代え難いという主張を展開している。ソロスなどは、このような人物を逮捕するロシアを、G8 から追放すべきだと主張している。そうだろうか。確かに、アメリカの会計事務所やコンサルティング会社に高額報酬で依頼すれば、会計制度や監査の報告はそれなりのものができる。しかし、それはもう後の祭りの話だ。すでに所有権を海外の持ち株会社や子会社に分散し、利益を移転できるシステムを作っておいて、「透明な会社になりました」で済ませられるだろうか。

アル中でも大統領になれる国である。新興実業家で、巨額の資産を保有するホドルコフスキーが大統領になっておかしいはずはない。「マフィアが首相に」と *Economist* 誌が批判したベルスコーニもいる。

逆に、こんなめっちゃくちゃな国は KGB の強権でもなければ、始末が付かないと考える見方もある。エリツインを手玉にとった一部のオリガークが、経済権力だけでなく、政治権力まで握れば、それこそ完全独裁ではないか。市民社会度が低い限り、ロシアはオリガークと、それから相対的に独立した政権の相互監視作用によってしか、機能していかないのではないか。

(さらに詳しい分析は、<http://morita.tateyama.hu> を参照されたい。2003年11月)